

## &lt;研究ノート&gt;

## 近刊に見る葬送

——陳放『都市危情』・老威『中国底層訪談録』から——

黄 當 時

## §1. はじめに

本稿は、中国で最近刊行された小説・ルポに葬送がどのように描かれているのかを見ようとするものである。

陳放<sup>1)</sup>『都市危情』<sup>2)</sup> (中国電影出版社, 2000年) は、第一巻1432頁がさらに上中下に分かれた、大部の、ハードボイルド社会派小説であり、老威『中国底層訪談録』<sup>3)</sup>

1) 小説にある陳放の紹介は以下の通りである。

著名な作家。かつて中共中央統戦部主管の大型期刊『華人世界』の編集主幹、人民日報と香港星島日報合資の文化刊行物『星光月刊』の常務副編集長を務める。

既発表の小説・政治評論・映画やテレビ映画の脚本等各種の文章は、総字数が一千万字以上である。作品は幾度も中華人民共和國政府賞や他の国際大賞を受け、香港(?)・台湾(?)・日本・韓国・フランス・アメリカで翻訳出版されている。

1999年に、陳放とキッシンジャー等十名は、日本の大型雑誌『現代週刊』(?)の年度世界著名知識分子に選ばれ、特に招請されて、国際情勢を分析する文章を書いている。

2) 小説のあらすじが以下のように紹介されている。

これは、内外で読者の広範な注目を集めた、強烈な現実主義的精神を持つ、現実世界の正気を発揚する優秀な長編小説である。

某市の常務副市長が突然、銃弾に当たって死亡し、激しく複雑な反腐敗闘争の幕が切って落とされる。市長の元の秘書が巨額の資金集めの嫌疑により逮捕される。弁公庁副主任が国外に逃亡する。テレビ局の女性司会者がセックスキャンダル嫌疑を受け手首を切って自殺する。腐敗の黒幕の一角があばかれ、国外逃亡した犯罪者が引き渡されて帰国し、市委員会の書記が逮捕されて入獄するが、偵察と反偵察の死力を尽くした闘争はまだ続いている。

犯罪の事実をしたための黒いノートが蒸発する。某副部長が職権を利用して犯罪人をかばい、公安局長を買収して拘禁中の犯罪人に密かに情報を流し、陪葬を仕掛けて女性検察官を無実の罪で入獄させると同時に、本当の犯罪人の国外逃亡を助ける。

巨額の収賄、麻薬の売買、文物の密輸という一連の犯罪行為を永久に覆い隠すために、犯罪集団は、極悪非道にも、内情を知る証人を次々に殺すが、ついには現実世界の正義の力の懲罰を逃れることができない。

本書は、物語が変化に富み、筋は手に汗を握るもので、事件の中に事件があり、一部がさらに他の一部と繋がっている。紀律検査・検察等の反腐敗の第一線で戦う英雄的群像を生き生きと描き出すとともに、力強いタッチで、腐敗分子の複雑な性格を描写し、彼らがどのようにして犯罪への道を歩んだのかを分析している。

本書は、深い認識価値と完璧な審美価値との統一を達成した。

(長江文芸出版社, 2001年) は, 60篇のインタビュー640頁が上下二巻に分かれたルポである。

## §2. 『都市危情』

### (2-1) 棺桶

棺桶は, “棺材” 或いは“寿材” といい, 旧時, 老人は60歳を越えると棺桶を用意した。“生在蘇州, 長在杭州, 食在広州, 死在柳州”(蘇州に生まれ, 杭州に育ち, 広州に食し, 柳州に死ぬ) といわれるように, 広西チワン族自治区の柳州産の木材が棺桶の材料として最上とされる。板の厚さにより, “五五”(5寸5分。20センチ弱) から“狗碰薄匣”(犬がぶつかっても壊れるほどの薄い板を釘付けにした安物) まで, 貧富により何段階もある。また, “瓦棺”(素焼きのもの) や“崖棺”(崖に掘り込んだもの) もある。

『都市危情』には, 急ごしらえの棺が登場する場面がある。

工事現場で急死した黎副市長(道路工事担当) が, 急ごしらえの棺に納められて帰宅するのだが, 勿論それは木でできたものではない。

黎尚民が突然, 心臓病で死亡したニュースは, 希望を彼に託していた労働者達をがっかりさせ, 激怒させた。未完成の外環道路に長蛇の葬送の列ができたが, みな道路建設労働者であった。

トラックが一台, ダンボールでこしらえた棺桶を乗せて, ゆっくりと進んだ。

トラックの前部には, 黎尚民の写真があった。

紙でできたのぼりが揺れて, 多くの人々が花輪を掲げて隊列とともに進んだ。

長い哀悼の対聯は書かれて間もない。……

年配の労働者が, 銅鑼を叩き, 泣き叫んだ。「黎副市長のお帰りだ! 黎副市長のお帰りだ!」

---

3) この本については以下のように紹介されている。

社会の底辺は, 一つの極めて専制的でもあり極めて自由でもある広がりである。人の欲望や本能は, ここでは極度に抑圧され, また極度に放出されてもいる。性・権力・血に対する飢え・食・サド・マゾ……あらゆる底辺の原始的な本能や生態・状態が真の原生態の手法でここに記録されている。

本書の作者老威がしたことは, 彼特有の向こう見ずなやり方で, 底辺における証拠品を収集し, さらに少しずつまとめ, 最終的に歴史の真実に還元したことである。

黎副市长は、工事現場で急死したために、ありあわせのダンボールで作られた棺に納められ、トラックで家路についた。

葬儀には、対聯や銅鑼を叩く風習があることも描写されている。

棺桶は、日常の会話に登場する単語であり、次に挙げる警官の発言は、普段よく使われる表現でもある。

警官はたばこの火を消して言った。「お前は棺桶を見ないうちは、涙を流さないんだな。……」

これは、なかなか白状しない泥棒に、警官が、重い処分をほのめかしたものである。中国語では、“不見棺材不落泪”という。

## (2-2) 火葬

『都市危情』には、事故死した陶素玲（紀律検査委員会幹部）が火葬される場面がある。やや長いが、中国における火葬の現実をうかがうことができるので引用しておきたい。

サントナは、「火葬課」と表示された建物の前に停まった。……

火葬室は、大きく、一方が火葬炉になっている。

短いコンベヤが一本あり、炉口に白い布が垂れ下がり、視線を遮っている。

数人の、丈の長い白い中国服を着た職員が肅然と立っている。……

課長が戻って来た。後ろから、丈の長い白い中国服を着た女子職員が二人、一台の車輪がついた寝台を押して、ゆっくりとついてきていた。

もう一人の女子職員は、両手に黒い漆の盆を持っており、上には白い布が敷かれ、布の上にははさみがおいてある。

課長が言った。「これでお別れです。」

女子職員が寝台の白いシーツをまくと、陶素玲の安らかな死に顔が現われた。

……

陶素玲の身体に掛けられた白いシーツがゆっくりと取られた。

陶素玲は、襟が前で合わさる、赤い中国服を着て、赤い革靴を履いていた。……

四人の職員が陶素玲を寝台から下ろし、コンベヤに乗せた。

課長が言った。「記念に、髪の毛を少し切り取って頂いて結構ですよ。」

陶鉄良は躊躇したが、はさみを取り上げると、陶素玲の髪を少し切り取って白布の上に置き、きちんと包んで、上着のポケットに入れた。

課長がスイッチを入れると、コンベヤが動き出した。

陶素玲が、炉口に移動していった。

コンベヤの振動で、陶素玲の片方の靴が脱げてしまった。

陳虎が駆け寄り、靴をしっかりと履かせた。

陶素玲の頭部が白いカーテンをくぐり、やがて全身がカーテンの奥に消えた。

この後、特別配慮により、二人は炉口の観察窓から中を見ることを許される。これは、一般の遺族には許されていない。

陶鉄良は、炉口の観察窓の鉄でできた扉を開けた。中には、一枚の透明な耐熱ガラスがあった。

陶素玲は、炉の中に横たわっていた。……突然、陶素玲の髪の毛や服が見えない風に吹き飛ばされたかのように、あっという間に全部無くなってしまった。炎が跡形もなく消えた。青白い裸の肉体が人間最後の尊厳を示していた。三秒後には炉内で、ぼうぼうと火が燃え盛り、陶素玲の身体は赤い火焰の中に消えた。……

課長は彼らを外に案内して言った。「これから身体をひっくり返します。女性の骨盤は燃えにくいので、職員が鉄のカギで骨格を碎きますから、見ないでおいて下さい。決して気持ちのいいものではありませんので。」

陳虎は、汚職取締局の部長である。ある日、事件現場からの帰り道に、車のブレーキを細工されていたために、同僚で恋人でもある陶素玲もろとも谷底に転落するが、重傷を負いながらも一人助かる。陶鉄良（公安局刑事部長）は、陶素玲の兄である。

文中にいつとは明示されていないが、この市にはホテルがあり、高速道路も通っていれば、近くに飛行場もあるので、現在の中国を描いたものと考えてよい。また、市の規模も決して小さいわけではないのに、ここでは、棺ごと火葬するのではなく、遺体だけがコンベヤに乗せられて火葬炉に送り込まれている。また、途中で、よく燃えるように、ひっくり返すようなことまでなされている。一時間という数字は、日本と同じようなものであろうが、火力の小さな炉を使用しているために、遺体をひっくり返す必要があるものと思われる。

棺を燃やさなければ、資源の節約になり、燃烧するものの絶対量が少ないわけであ

るから、エネルギーの消費も確実に少ない。今や、人類にとって、環境の保護や地球の温暖化の防止は、焦眉之急である。お題目を称えるだけでなく、エネルギー（特に化石燃料）の消費を抑えるよう、まじめに取り組む必要がある。中国のやり方を見習いたいところであるが、日本の読者にはショッキングな内容であろう。韓国の読者には、どうであろうか。

### §3. 『中国底層訪談録』

#### (3-1) “遺体整容師”・張道陵<sup>4)</sup>

張道陵氏は、川東某県の斎場に勤務する古参の“遺体整容師”である。1957年に美専を卒業した、斎場第一期の職員である。

この年の六月初旬、反右派闘争が大規模に開始された。張氏は言う。

「反右派の最中であって、組織の分配に従わないと、右傾分子にされる恐れが十分でした。その頃、斎場は暇で、職員も十人未満でした。無縁も含め、火葬者は月に数人程度です。中央では火葬が大いに提唱され、毛沢東、朱徳、劉少奇、周恩来等が“実行火葬、移風易俗”（火葬を行い、古い風俗・習慣を改めていこう）と呼掛け、科学の進歩のために遺体を寄贈する志願書に率先して署名しました。が、土葬は中国では数千年の伝統があり、改めるのは容易ではありませんでした。」

土葬は原始時代から行われている。秦・漢代に中央集権化すると、支配層は、その至高の権力を顕示するために、莫大な費用を費やして陵墓を建造したが、同時に、“入土為安”、“身体髪膚、受之父母、不敢毀傷”等の倫理観でもって火葬を禁止した。そのため、土葬が代々受継がれ、漢民族の主要な埋葬法となった。

火葬については、『墨子・節葬』に“秦之西有儀渠之國、其親戚死、聚薪柴而焚之”とあり、『列子・楊朱』は晏平仲の言葉“既死、豈在我哉、焚之亦可……”を載せている。宋代には江南で盛んに行われるようになり、“化人亭”が多数建てられた。元代には更に盛んとなり、マルコ・ポーロの『東方見聞録』によれば、京・冀・晋・江・浙・巴蜀等に“人死焚其尸”の習俗があった。

中国の火葬率は、83年の時点では、都市部で90%以上であるが、全国平均は30%前後で、農村部では依然として土葬が多かった。全国で1,200近くの火葬場があり、2,500余の火葬用炉があった（『人民日報』83.4.16）。

4) インタビューは、1995年9月30日に行なわれた。

中国で最も多く使用されている字書は『新華字典』であり、日本でも中国語の学習や教育に欠くことのできない工具書である<sup>5)</sup>。その1971年修訂重排本は、「葬」の用例として、「葬在人民公墓」を挙げていたが、1988年新訂第6版からは、「埋葬」「火葬」と改められている。社会情勢や使用頻度を考慮した修訂であろうが、「人民公墓」の減少や、「火葬」の推進・普及が背景にあらう。

なお、98年の北京のケースであるが、北京埋葬管理处の統計では、市全体の火葬率は98%に達し、市街地では99%を超え、一部の辺鄙な山地の火葬条件のないところだけが土葬の習俗を残している。また、火葬後に、遺骨を直接家に受け入れるのも、一部の北京の人々には伝統的な安置法である（馬多思「百年之後何処去？」『北京晚報』98.6.9）。

火葬を呼掛けた毛沢東は、その死後に後継者が必要としたため北京の記念堂に眠っている。『都市危情』からそのことに触れた場面を次に引用する。

蘇三趙はさっさとベッドに胡座をかき、蠟燭を傾けて、数滴滴らしてから蠟燭をベッドに立てた。

「全くでたらめだ。毛主席がガバッと起き上がって、水晶の棺から出て来たところで、はっきりさせられるかね。双喜のじいさんと息子の二人は魔がさしたのだ。無理もない。数十年苦勞して、一晩で解放前に戻ったんだから。労働者の鉄の飯茶碗は、割れる割れると言っているうちに本当に割れてしまった。改革改革、と言うけど、どうして労働者だけを改革して、役人は改革しないんだ。役人は資本家よりもひどい。……」

毛沢東（1893年12月26日～1976年9月9日）は、57年の反右派闘争からソ連訪問、そして58年の各地巡行と続く間に、情勢判断に誤りを重ねはじめた。毛沢東は、強引に人民公社建設、大躍進発動に踏み切り、継続革命の考え方を鮮明にしたが、それは近代的経済開発に対する無理解をはらむものであった。

---

5) 『新華字典』は、1953年に新華辞書社から出版されたのが最初である。56年に人民出版社改訂版が出版されたが、その後、59年5月に商務印書館からアルファベット順に字を配列したものが出て、内容を一新した。以来、71年、79年と逐次改訂増刷されている。81年の辞典類出版部数では1,500万冊と最高位であった。

2000年1月にその大字本が出版されたが、その裏表紙の紹介によれば、販売量三億冊の、中国における字書のベストセラーである。三億冊という宣伝文句もあながち誇張ではなからう。

大躍進の時、各地に建設された土法の高炉は、立地条件を考慮せずに建てたものもあり、生産された大量の粗悪な鉄が使えないまま放置され、人々を驚かせた。製鉄・製鋼法は十九世紀のベッセマー法の開発にはるか先立つ時代にすでにあり、中国では鑄鉄から直接炭素を除く方法は紀元前に、鑄鉄と鍛鉄を混ぜる方法は五世紀にすでに開発されており、後者はアラビアを経て十六世紀のヨーロッパの平炉法の原形になったといわれる。伝統的手法による高炉が行われても不思議ではないが、その技術が十分に高度化されていなかったために、コークスの使用量が多く製品の質が悪かった。

この土法製鉄の波は、斎場にもおしよせた。張氏は言う。

「政治優先は時代の潮流で、政治は国民全てに共通する第一の職業でした。斎場で仕事がなく、壁新聞を書いていたこともあります。

1958年に、土法製鉄が一番盛んな時、民衆がおしかけて、死体焼却炉を鑄鋼炉に改造するよう提案したことがありました。一年に何体も処理するわけではないから、製鉄し“超英赶美”（英米に追いつき追い越す）のに貢献してはどうか、というのがその言い分でした。場長が、炉の設計が違う、と説明したのですが、人々は信じませんでした。人間か鉄鋼か、対象が違うだけで、火を使って精製するのに違いはない、と考えたものだから、大躍進に反対したという罪名で、場長を捕まえてしまったのです。そして我先に場内に鉱石やコークスを運び込みました。県委員会書記自らが駆けつけて、なんとか皆を説得し、場内に在来の方法による小さな高炉の建設を認めました。これで斎場はにぎやかになりました。死体を焼却せずに、屑鉄をたくさん精練したものです。」

大躍進運動挫折後の1959年から61年を“三年経済困難時期”（略して“三年困難”）というが、この三年間は、自然災害に連続して見舞われ、食糧難を含む経済的に困難な時期であった。張氏は言う。

「三年の自然災害で、この県では何万人もが餓死しました。埋葬も大変でしたが、棺桶も足りず、むしろにぐるんで斎場に運び込まれました。1960年の後半は、忙しくて夜も残業をしました。今では、スイッチ一つで、自動的にコンベヤで送り込まれ、扉が閉まり、焼却されて骨が出てきますが、当時、死体の焼却は力仕事でした。抱きかかえて中に入れなければならなかったのです。電気系統の故障で、火が急に燃え上がり、顔中すすだらけになることもありました。そのうえ外では遺族がしきりに泣くものだから、自分は死刑執行人のようなものだと思ったものです。」

抱きかかえる、とあるから棺ごと火葬したのではないことがわかる。コンベヤにそのまま載せるやり方は『都市危情』の描写と同じである。『都市危情』と違って、よ

く燃えるように身体を引っくり返す、との発言はないが、実際にそうしなかったから言わなかったのか、会話の流れから出てこなかっただけなのか、どちらとも言えない。

「餓死者に美容を施すようなことはありませんでした。初めのうちは、伸びた舌を口の中に押込み、綿を入れて頬をふくらませていましたが、後になると、構っていらなくなりました。一束一束の薪に思えました。1961年の春の端境期になると、何百何千という人々が野や山に出かけ、拾ったものは何でも口に入れました。樹皮、草の根、野草、さらには昆虫もです。禿山にいいものがあるはずがありません。山で歩いているうちに、地面に倒れ、そのまま亡くなる人もいました。斎場の職員は、県が手配してくれた死体収集トラックをふもとの道端に停めて、地・富・反・壊・右の“五類分子”が基幹民兵の監視のもとに山に登り、死体を拾うのを待ちました。“五類分子”も餓えてどうにもならず、“饅頭”（マントウ、中国式蒸しパン）でも発給しないと頭を抱えて身を縮め、銃床でどんなに小突いても山に登りません。そこで、支部書記が抛屍法を発明しました。長いロープで何体かの死体をくくり、互いの牽引力を利用して、転がしながら下に放るのです。これでかなり助かりました。」

“五類分子”とは、文革中に定めた排除すべき反社会主義分子のことである。略称はそれぞれ、地主・富農・反革命分子・悪質内分子・右派分子を指す。

「斎場は、県にとって重要な部門でした。焼却炉が故障したり職員が身体を壊するのが一番困るので、“口糧”（一人分の食糧）は基本的に保障されていましたが、大食いの人には辛いものがありました。」

“口糧”は、もとは軍隊で支給される一人分の食糧を指す言葉であったが、後に広く使われるようになったものである。

「1962年の初め、ついに人食いが出ました。山から運んで帰った死体は、ほとんど手足バラバラで、太股、腕の付け根、肩や尻の肉は削ぎ落とされており、上司からは早く処理してしまうように指示されました。当時民兵は昼間は休み、夜出かけて人食らいを捕まえて刑罰を下していました。人を食らうのは、人肉がうまいからではなく、“糠饅頭”（ぬかのマントウ、蒸しパン）と“観音土”が体内に溜まると、下腹がふくれ、排便ができないので、人肉で便通をよくするのです。」

“観音土”は“観音粉”ともいうが、一種の白い粘土である。旧社会では飢饉の時に被災民がよくこの粘土で飢えをしのごうとして死亡した。

「1962年に、“浮腫病”（“水腫”の通称。むくむ病気）を患い、もう少しで死ぬところでしたので、飢えが恐いのです。当時、幹部であった父は、こっそりと、支給され



た一人分の食糧を倅約して家に持ち帰り、自分は外でいいかげんな食べ方をしていました。人民服のポケットには、二本の万年筆のほかに、匙が一本さしてありました。誰かがお椀を持っていれば、にやりとして匙を突っ込み味見をしたのです。」

「後に、斎場は拡張され、追悼会堂が増築されました。会堂の通用門から入ると、“遺体整容”室です。自然災害が過ぎると、もうソ修に首を絞められることもなくなり、出棺と埋葬の仕事も軌道に乗りました。当時は“整容”にも等級があり、学歴が高い人や比較的裕福な人は、自然と要求が高いのです。普通の人は、追悼会もせず、遺体告別式をするだけなので、“整容”の内容も顔を洗い、髪を梳かし、口に綿を入れ、紅をつけて終わりでした。」

「死者の生前の社会的な地位で決まります。完全な“整容”は、先ず死体を隅々まで綺麗に洗い、防腐専用の香水を降りかけます。それから着替えて散髪します。さらに少しづつ皮膚の見える部分を按摩します。額から頬、唇、首、そして手と、“起死回生”となるまで何度も按摩します。生きている人と同じように皮膚に弾力性を持たせてから、油を塗り、つやを出します。それから化粧や美容で、リズムは速くても遅くてもいけません。適当な色の組合せを考え、眉尻、口元、小鼻はどれも重要ですが、キーポイントは目です。安らかに眠っているという感じを出さねばなりません。一般の人は亡くなると、家に二三日置かれて、“霊堂”（柩を安置する部屋）をこしらえて弔いますが、斎場に着いた時には、身体は硬直し、頬は窪み、顔色はどす黒くなっています。気温が高いと、異臭もします。このような時に遺族が儀式をしたいとか、“化粧整容”したいとか言い出しても、非常に難しいことになります。この職業に就く者は、生理的精神的にとりわけ健康でなければなりません。医者が解剖をするように、我を忘れて、齒をむき出しにした横死者を次第に元通りにし、にっこりさせなければなりません。

勇気がいるように見えますが、訓練です。失敗すればもう一度すればいいのです。何事も慣れればこつが分かります。」

### (3-2) 楽士兼号喪者・李長庚<sup>6)</sup>

楽士は、次第に消え行く職業である。彼らは、旧式の婚礼・葬儀の際に呼ばれる。

「改革・開放後、運が向いてきて、しばらくの間よく呼ばれましたが、今では、婚礼や葬儀の簡素化が言われ、チャルメラを吹きに呼ばれることが少なくなりました。」

---

6) インタビューは、1994年9月2日に行なわれた。

改革開放は、鄧小平（1904年8月22日～1997年2月19日）が1980年代から始めた政策で、社会主義経済から市場主義経済への転換を図ったものである。

「人間社会がある限り、この職業はなくならないはずでしたが、町ではやることは田舎でもはやり、若者は香港のビデオを見ると、その真似をします。農村では洋風の婚礼を挙げる条件はありませんが、少なくとも“花轎”（結婚用の輿<sup>こし</sup>）の代わりに、“花車”（結婚用の車）には乗れます。にぎやかに飾りつけた車を連ねる方が、これまでのやり方よりもずっと見た目にもはで格好がいいのです。」

“花轎”とは、婚礼で新婦を乗せる飾りつけた輿であり、“彩轎”“喜轎”ともいう。“花車”とは、婚礼で出迎えのために仕立てる、花で飾りをつけた自動車のことである。

婚礼の時に、新郎新婦が天地の神（の位牌）に礼拝してから向かい合って礼拝する儀式（中国語で“拝堂”。“拝天地”ともいう）があり、チャルメラの吹奏もあった。

「風俗・習慣が変わり、このような“拝堂”をしなくなったところも多いのです。披露宴では、適当に司会者を決めて、笑わせたり、騒いだり、父母や親戚・友人にスピーチさせています。」

婚礼に楽士を呼ぶ家庭はあるが、はやらなくなったのである。

“霊堂（柩を安置してある部屋）辞親”・“孝子（親の喪に服している人）開路”・“夜半招魂”にチャルメラは欠かせない。

「電話一本で、葬儀屋が駆けつけます。“霊棚”（柩を安置する臨時的掛け小屋）を組み、花輪や楽隊、歌手の手配をし、葬送では先頭に立って進んでくれる、など至れり尽くせりです。」

告別式や追悼式では、金銀の紙で飾られた造花の花輪を用いることが多い。

「にぎやかに過ごすものです。昔は、坊主を呼んで、読経、法事をしてもらい、楽士を呼んで、“孝子”に付き添ってもらったものです。今じゃ、音楽の夕べを開き、歌手に歌謡曲を歌ってもらい、親戚友人も争って死者のためにリクエストします。歌の内容は多種多様で、歌手が少し語句を入れ替えて歌えば、拍手喝采を受けるのです。」

「葬送でも、“孝子扶棺”は必要ではなくなりました。車が連なり、西洋管楽隊が大きなスピーカーで音楽を流せば、誰かが亡くなったことがわかるのです。」

「街から遠く離れた山里に行けば、何とか仕事があります。チャルメラを教えた弟子たちも、商売替えして、今では、習う者はいません。」

「学識や理解が浅く、無知な人々からは、蔑<sup>さげす</sup>まれました。が、楽士は、もとは決し

て下賤な職業ではありませんでした。その祖師は、孔子であり、母親を供養するために、チャルメラを吹き、白い麻の服を着て喪に服し、棺に触れて大声をあげて泣きました。そういうわけで、楽士の家には、孔子の位牌<sup>7)</sup>が祭られているのです。」

楽士は、チャルメラを吹くだけでなく、大声で泣かねばならないのである。

「号喪にも、旋律があります。チャルメラの旋律と号喪の旋律は、師匠から反復練習させられました。基礎ができれば、天地を揺るがすほどの演技ができますし、“孝子”よりも真に迫っています。」

号喪の旋律には、『送魂調』『追魂調』『安魂調』『喚魂調』『辞親調』『大悲調』『小悲調』『封棺調』『渡亡調』『陪葬調』『下葬調』『回頭調』『撕心裂肺調』『嗚呼哀哉調』がある。

「これらの音階は、昔の人が推敲に推敲を重ねて、代々伝えてきたもので、高い個所、低い個所、かすれる個所、高く上げる個所、空泣きする個所、湿っぽく泣く個所、全身を震わし声にならない個所、等いずれも工夫が凝らされています。」

「一般に、遺族は、遺体を見ると、抑えられずに大声で悲しみますが、長続きしません。感極まって気絶したり、ショックを起こす場合もありますが、楽士は感情移入した後は、引き締めたり緩めたり、自由自在で、泣きたいだけ泣くことができます。二日二晩泣くような猛者もいます。」

「チャルメラが開場調を吹き鳴らすと、白い麻の喪服を着た楽士たちは整然と死者の位牌に三拝九叩します。そうして2、3グループに分かれてかわるがわる哭、泣、号をします。泣と号は、休憩と労働のようなもので、哭はつなぎであり、労働あるいは休憩の準備です。

チャルメラであれ、喪調であれ、感情を移入し、雰囲気を作るためのものです。

遺族は主役ですが、心から泣いたりしたとたんに、へなへなとなってしまいます。主役が退出してしまった後、脇役の演技が始まったばかりということもよくあり、最後まで持ちこたえられるのは、偽の遺族ということになります。」

「昔は、“霊棚”を組んだら、何卓も麻雀卓が並べられ、通夜に来ているのに、賭事に心が奪われ、追悼文を作ることも忘れてしまうような人がいました。」

今では隣近所から騒音公害だと文句を言われるが、八十年代までは、夜通し“囲鼓”（舞台衣装は着けず、歌うだけの四川劇）を演じるのが盛んであった。出し物

7) 大形徹『魂のありか 中国古代の靈魂観』は、位牌に関して次のように言う (p.62)。

儒教の儀礼では、「木主（神主）」すなわち、位牌が考えられており、やや複雑となるが、これもまた、ふらふらととびまわる魂をよりつかせるためのものといえる。

は、“鬼戯”（幽霊もの）である。見に来る者も多く、葬儀は人々にとって集いの場であった。

「号喪は重要ですが、それは、チャルメラを吹いたり、芝居を演じたりするよりも、難しいからです。演技でありながら、演技と思われないようにしなければなりません。また、うまくできたかどうかが収入の多寡に直結するのです。」

「納棺から、最後の告別，“封棺”（閉棺）、さらに埋葬まで、遺族は死者と向き合うどの場面でも、感極まります。楽士は、懸命に哭号しながら、死体にすがろうとする人を引き止めねばなりません。遺族の告別が済んだ後、楽士は前に出て悲しみの雰囲気気を盛り上げます。一般的には，“封棺”の前に、五、六名の楽士が棺に飛びつこうとするのを、他の者たちがしっかりと引き留めます。これを、蓋が閉じられ、釘が打ち込まれるまでに三度行ないます。」

「号は、主号と伴号に分かれます。事後、皆が集まり、評定します。皆で意見を出し合い、改善します。声が大きい以外に、処理ができるかどうかも見ます。緩慢と全身、特に顔、手、肩が大切です。肝心なところでの切り替えはもっと重要です。」

漢民族の一部と満州族、朝鮮族の出棺の禁忌として、偶数日に出棺しない、というものがある。偶数日に出棺すれば死者も二人になってしまう、と考えるため、奇数日にしか出棺しない。また、満州族は以前、通常の出入口は人間が出入りするものなので、死者が通るのを忌み嫌って、窓から出棺した。

四川では、婚礼であれ、葬儀であれ、格式張る。伝統的な民俗も少なくない。

「大きなお屋敷では、人々を呼んで“川劇囲鼓”を演じてもらうとともに、僧侶を呼んで読経してもらい死者の霊を済度します。」

“川劇”は、四川地方の伝統劇である。“川劇囲鼓”と四文字で表現しているが、意味は前出の“囲鼓”と同じである。

「ここは田舎ですが、来たばかりの時、金儲けのことは考えず、一日三食にありつければとだけ考えていました。48年に急性伝染病が発生し、道端にも死体が見られましたが、それで助かりました。」

「街には“袍哥”の組織（<sup>かろうかい</sup>哥老会。秘密結社を“幫会”というが、その一つ）があり、怒らせると、“三刀六洞”（寄ってたかって包丁でぶすりとやられる）ということになるから、割り込むわけにはいきません。ショバ代も払えるような額ではありません。勿論、田舎にも“袍哥”はいます。」

哥老会とは、清末の中国最大の秘密結社の一つである。華北の<sup>びやくれんきょう</sup>白蓮教、華南の<sup>てん</sup>天地会とならんで華中の長江流域に地盤を持った。十八世紀、四川省に生まれた<sup>かくろかい</sup>嚼嚙会

を母体とし、白蓮教・天地会の要素を取り入れ、十九世紀前半に成立。天地会と同じく洪門を名乗り、「反清復明」を唱えるようになった。特定の本部を持たず、各地で山号、堂号をたてて分立し、各種の別名を生じた。各山堂の首領を正龍頭、会員を袍哥という。秘籍「海底」（「金不換」）を持つ。会内の隠語や暗号には天地会と類似のものが多く、十九世紀後半、太平天国を鎮圧した義勇軍の解散兵士が入会して大勢力となり、各地でキリスト教排撃暴動を起こした。十九世紀末から二十世紀初頭、革命派の工作を受けて各地で革命派と連合した組織を作り、反清暴動を激発させた。民国時代には天地会と一体になり、紅幫（洪門）となった。

「時代が変わり、今ではこのような職業は下り坂です。」

「（破四旧や文化大革命の時も）仕事は変えませんでした、調子は変えました。解放を祝って、“秧歌”（ヤンコ）踊りが踊られました。私たち葬儀屋は、変身し、チャルメラは『解放区の空は晴れ渡っている』を斉奏しました。続いてやってきた政治運動も同じで、大衆を立ち上がらせるのに、文芸の出し物は欠かせません。上から吹くように言われた曲を吹きました。芸人は、昼間は三食、夜は一宿あればよいのであって、それほど不満はありませんでした。」

文化大革命（略称文革）は、1966年5月の「5・16通達」発出から76年10月の「四人組」失脚までの約十年にわたった大規模な政治運動である。その期間中は、公式的には“無産階級文化大革命”（プロレタリア文化大革命）と呼ばれたが、今では、「毛沢東主席が誤まって発動し、林彪・江青反革命集団によって利用されて、党・国家と各族人民にゆゆしい災難をもたらした内乱」であると、完全に否定されている。

四旧とは、四つの古いものの意で、搾取階級の“旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣”を指す。1966年8月8日付けの文革に関する“十六条”で初出。紅衛兵は、“四旧一新”を叫んで道路の名を変えたり、寺院や廟を破壊したりした。

“秧歌”は、中国北方の農村で広く行われる田植え踊りである。どらや太鼓に合わせて歌いながら踊る民間舞踊で、節句や祝い事の時に行なわれる。

「三年の自然災害で餓死者が次から次に出ましたが、それでも天下泰平調を吹きました。喪に服しすぎると、人間は真心をなくします。この時世では、決して正義の血に燃えて疾走するものではありません。今日は“大鳴大放”ですから、あなたも疾走しなさい、と言われる。そしたら次は、はいそこまで、十分疾走しましたね、では“労改”に行ってください、となる。で、しっぽを巻いて、数十年。ですから、人間はあまり真心を持つてはいけないのです。」

1956年5月、党は“百花斉放、百家争鳴”をスローガンに、党内外における自由な

論議を呼びかけたが、政府・党への厳しい批判が百出したため、一転して言論を封じ、「右派」の肅清を開始した。インテリ層を中心に多数の人々が「右派」として弾圧された。「四人組」追放後の1978年に、反右派闘争には誤りがあったと総括され、「右派」とされた人々の再審査が進み、「平反」（名誉回復）が行われた。

“大鳴大放”は、自由に発言し、大いに意見を述べることで、“百花齊放，百家争鳴”に由来するスローガンである。

“労改”は、“労働改造”の略で、犯罪者に強制肉体労働を課し、それを通じて改心させるものである。

「51年には、葬儀屋は解体し、皆散り散りばらばらになりました。その後は、この楽士と同じで、普段は家で農業をし、周囲数十華里で冠婚葬祭があれば、人が自ずと呼びに来ます。私は名が売れているから、年中仕事があります。もう一度葬儀屋を作って、各地で仕事をすれば、と勧められたこともありましたが、よく考えてみると、まずいのです。そんなものでも民間の組織になりますし、どこが管理するのでしょうか。管理する部門がない組織は、中国では非合法ですし、非合法の次は反動で、こんなものには関わりたくありません。」

老威の祖父によれば、昔、“吆屍人”（文字通りには、掛声を発しながら遺体を運ぶ人）は、一つの職業であった。高額で依頼されて、異郷で客死した死体を五十キロ、五百キロの遠路を家に運んで帰るのが仕事であった。

「昔、専門に“吆屍人”をしていた人がいました。彼らは一般に夜道を急いだのです。」

日中、このようにして死者を運ぶと通行人にじろじろ見られてやりにくいし、障害が多く、歩きにくいので、夜間を選んで移動する、と考えるのが表面的には合理的である。しかし、昼間は生者の世界であり、夜は幽霊の世界と考えられていたので、死者（が動く）には夜がふさわしいため、でもあったはずである。夜が明けると鬼（つまり幽霊）の世界と人の世界とがいれかわるので、“吆屍人”は夜明けと同時に宿駅で休んだのではないか。従って、重病で道を急ぐとしても、生きている限りは夜間を避けて日中に移動したことであろう。

フクロウやミミズクの鳴き声は、人が死ぬ前兆と考えられていた。これらの鳥は、目の構造が他の鳥と違い、夜間にしか捕食などの活動ができない。そのためであろうか、その姿勢であれ鳴き声であれ、魂を引き抜き、死亡通知を出すものと考えられた。旧時、この概念は、広範囲に見られ、今もなお一部に残っている。

「“吆屍人”は、二人で前後に一組になり、籠かきのように死体を引き、風のように

歩きます。道中エイホエイホと掛け声を出します。」

「死者も見たところは、生きている人間と完全に歩調が一致していますが、そうしてはじめて慣性のリズムを保つことができるのです。もしも夜道で、運悪く、“**𦣻屍人**”に出会ったなら、避けるしかありません。でないと、彼らはエイホエイホと真っ正面からぶつかって来ます。このような三位一体の歩き方は、歩きにくいばかりでなく、急に曲がれません。」

異郷（特に、故郷から遠く離れたところ）で死亡した場合、肉体（死体）は、ゆっくりと帰らなければならなかった。外出した時の道順を思い出し、確かめながらでないと、霊は帰り道がわからなくなり、家にたどりつけない、という考え方からであった。車や馬を使ってもよいが、速度を落としてゆっくり移動しなければならなかった。ここには、急に曲がれない、とあるが、徒歩の“**𦣻屍人**”がどんなに急いだところで、霊がついてくるのに問題はなかろう。

『都市危情』にも、霊魂が自分の家を見つけられるように配慮する場面がある。

「引越しはしません、もし引越したら、息子の魂は家が見つけられなくなります。」

息子・黎尚民の死後に訪ねてきた焦鵬遠が、広い高級幹部棟への引越しを勧めたのに対して、黎尚民の父親が言ったことである。霊の存在が肯定され、霊が家に帰る際に、家が見つからないと困るというのである。

「夜ではありませんが、昼間、“**𦣻屍人**”を見たことがありました。49年に、地元の商人が商用で江西に出かけた時、敗走兵に撃ち殺されました。当時、交通は水陸とも極めて不便でしたが、友人は現地で処置するに忍びず、多額の金で“**𦣻屍人**”に委託しました。およそ一週間して、死体は故郷に連れ戻されましたが、顔は生きているかのようでした。」

腐敗しないとは、荒唐無稽であるが、大形徹『魂のありか 中国古代の靈魂観』（p.56）は、遺体の腐敗に関して次のように言っている<sup>8)</sup>。

8) 京都新聞（2001・3・31）に「5百年前の弾力ある遺体」と題する記事があるので引用しておきたい。

【上海30日共同】三十日付の上海紙、解放日報は江蘇省南京市でこのほど、皮膚に弾力があり、手や腕を動かすことができるほど保存のよい約五百年前の明代の遺体が発掘されたと報じた。

明代の墓から見つかったもので、身長一七一釐、約三〇釐の白いひげが生えており、死亡時の年齢は六十歳前後とみられる。腕や大腿部には弾性があり、肩やひじなども動か

遺体が腐敗することも、古代の感覚によれば、罔<sup>もうりょう</sup>罔<sup>よう</sup>など体内に入りこむとされた悪霊が食らっているとみなされたのであろう。玉には殺菌効果があり、実際に遺体が腐敗しないこともあった。古代の人々は玉が悪霊の侵入を防ぐと考えたのであろう。

「商人の苗字は陸といいます。私の手で出棺したのですから、間違いありません。“吆屍人”は、昼間眠ります。若く、好奇心旺盛でしたので、窓の紙を舐めて破って見たのですが、真暗で、ものすごいびきしか聞こえませんでした。夜になると、もう影も形もありませんでした。皆は棒に魔法があるのではないかと疑っていましたので、伍君が“吆屍人”の棒を盗み出して見てみようと思いました。かんぬきをちょっと動かしたとたんに、中から黒い影がフッと飛びかかって来ました。目を凝らしてよく見ると、黒猫でした。“吆屍人”は、猫を随行させていました。出発の時、彼らは、板のように壁に立てかけた死体を部屋から出すと、前後でしっかりはさんで、猫を死体の上で何度か歩かせましたが、これを“過電”（通電する）といいます。“過電”しておえると、三人は体育でやるようにしばらくその場で足踏みしてからエイホエイホと出発するのです。」

迷い込んで来た豚や犬猫については、“猪来窮家，狗来富家，猫来孝家”という諺があるが、それによれば、猫が（迷い込んで）来ると、その家では葬儀を執り行なうことになる、というのであり、漢民族では広範囲にわたって信じられていた。今でも、少しはその考え方が残っているようである。

猫は、手近な動物の中では、鬼<sup>き</sup>の世界に属するものとして好適であるので、人の世界から鬼の世界に入る心の準備をするとともに、鬼の世界を安全に通り返けられるように守ってほしいとの願いを込めて、出発前に猫に死体の上を歩かせているのではないだろうか。

#### §4. おわりに

以上見てきたように、この小説には、中国での葬送が実際にどのように執り行なわれているのか、が描かれている。多くを取り上げることはできなかったが、立場の違

---

／ せるという。

南京医科大学で遺体を調査しているが、遺体の入っていた棺は空気が入りにくくなっていた上、中に入れられていた薬草が地下水と混じり、防腐効果を生んだとみている。



う多様な登場人物の口に語らせたり、地の文章を通して、様々な観点の死生観が提示されている。また、ルポに登場する二人が語ることも一般に聞くことのできない興味深いものである。

#### 参考文献

- 藤堂明保他編『最新中国情報辞典』小学館，1985年。  
 山田辰雄編『近代中国人名辞典』霞山会，1995年。  
 鄭伝寅・張健主編『中国民俗辞典』商務印書館・湖北辞書出版社，1987年。  
 北京商務印書館・小学館共同編集『中日辞典』小学館，1992年。  
 大東文化大学中国語大辞典編纂室編『現代漢語辞海』北京大学出版社，1999年。  
 『新華字典』1971年修訂重排本，商務印書館，1971年。  
 『新華字典』1988年新訂第6版，東方書店，1991年。  
 『新華字典』大字本，商務印書館，2000年。  
 安藤彦太郎編『現代中国事典』講談社，1978年。  
 『歴史読本 臨時増刊 特集 中国 謎の秘密結社』新人物往来社，1988年。  
 黄當時「中国青年の死生観と祭祀 —— アンケート調査の結果より ——」『佛教大学総合研究所紀要』第七号，佛教大学総合研究所，2000年。